鳩間方言のアクセント――数詞/助数詞

ローレンス・ウェイン⁽¹⁾

はじめに

本稿では、沖縄県竹富町鳩間島の鳩間方言の数詞/助数詞の結合のアクセントを 記述し、音韻論的な考慮を加えることによって、可能な限り簡潔な大系を得よう とする。アクセント体系の解明が目的なので、助数詞が指し示す意味領域(概念 範疇)やアクセント以外の形態音韻論的側面への言及を必要最小限にとどめる。

鳩間方言の体言アクセントの基本的な分析はローレンス(1997)が論じている が、本稿にはこれをふまえているところがあるので、併せて読んでいただきたい。

本稿で用いる表記は、音調を除いては音韻表記で、音調は高い部分に上線を引いて示す音声表記である。

鳩間方言の助数詞を紹介するものとして加治工(1983:299-300)がある。本 稿で取り扱うデータはすべて鳩間方言の母語話者である加治工真市教授から面接 調査で得られたものである。

なお、鳩間方言において、助数詞と数量詞は音韻論によって区別されることは ないので、本稿では、二つをまとめて助数詞と呼び、数詞と助数詞、あるいは数 詞と数詞の結合を数量表現と呼ぶことにする。

1. 和語系数詞

音調からみて、和語系数詞(^{ひと}・ ^{ビ・}・ [・] ・ ・ ・)と結合して数量表現を形成する典型的なものとして-masi(田地一枚)が挙げられる。

(1)	pusumasi	(田地一枚)	hutamasi	(二枚)	miimasi	(三枚)
	juumasi	(四枚)	icimasi	(五枚)	muumasi	(六枚)
	nanamasi	(七枚)	jaamasi	(八枚)	kunumasi	(九枚)
	tuumasi	(十枚)	gjuumasi	(幾枚)		

鳩間方言では、前部成素によって音調型が決定されるので、この例から和語系数 詞の1,5,7,9が起伏型で、2,3,4,6,8,10,「幾-」は高平型音調であることがわか る。⁽²⁾また、(1)の音調の下がり目(=下がり核)の位置から、これは複合名詞の音 調であることがわかる。起伏型複合名詞の場合、後部成素の長さによって、下が り核の位置が決まる。後部成素の、末尾音節を除いた語末に近い偶数モーラに付 与されるが⁽³⁾偶数モーラがないときは、前部成素の末尾音節に下がり核が現れる。

(2)	pusuti 一年目	pusujuu 一晚
	pusukisi 一切れ	pususaban 茶碗一杯
	pusumaaru 一周	pusutukuru 一ヶ所
	pususakasiki 盃一杯	pu suhun kiru 畑の一区分

但し、重破裂音で始まる後部成素(助数詞)の場合は、頭子音は前部成素(数詞)の最終音節に入って初めてモーラ性を獲得するから、後部成素のモーラ数(韻脚構造)には入らない(ローレンス1997注1)。⁽⁴⁾

(3) pusukkara 一匹 pusukkumi 一対 pusukkubi 着物一着

(1-3)の複合名詞音調が無標で、和語系数詞と共起する助数詞のほとんどは このタイプになる。⁽⁵⁾

複合名詞音調と異なる音調をとるのは-musi(回)と-mutu(本)である。

i (六回)
si (九回)

起伏型の語形は、下がり核が次末音節にくる。これは起伏型の単純名詞の音調で ある。複合名詞でありながら、単純名詞の音調をとるものは、少数ではあるが、 存在する(ローレンス1997 §2.4.3)ことから、- musi,- mutu も同じように例 外扱いにしてよさそうである。

(5)の-ira (枚),-iru (尋)は(4)の-musi,-mutuと同様、下がり核が次末 モーラにきているが、(4)のようには例外視(有標扱い)しない方が妥当であると 思われる節がある。

(5)	pusuiru ~ pusuhiru (一尋)	pusuira (一枚)
	hutairu ~ hutahiru (二尋)	hutaira (二枚)
	miiru ~ miihiru (三尋)	miira (三枚)
	juiru ~ juuhiru (四尋)	juira (四枚)
	guiru ~ icihiru ~ iciiru (五尋)	iciira (五枚)
	muiru ~ muuhiru (六尋)	muira (六枚)
	nanairu ~ nanahiru (七尋)	nanaira (七枚)
	jairu ~ jaahiru (八尋)	jaira (八枚)
	kunuiru ~ kunuhiru (九尋)	kunuira (九枚)
	tuiru ~ tuuhiru (十尋)	tuira (十枚)
	gjuuhiru (幾尋)	gjuira ~ gjuuira (幾枚)

pusuiru ~ pusuhiru の交替については、普通の発音では pusuiru になるが、特 に丁寧に発音すれば pusuhiru になるとのことである。(しかし、 5 の場合は逆 に icihiru が普通で、iciiru という発音はぞんざい。)pusuiru と発音されるが、 * pusuiru だという意識が強いそうである。一方では、 pusuiru と発音されるが、 * pusuira という意識はないという。この違いを説明するために次の派生を仮 定する。まず、 pusuhiru → pusuiru という共時的な変化を想定する。h-削除 で u と i が隣接するが、音韻論は普通分節音を最小数の音節にまとめようとする ので、 再音節化によって-i が先行する音節に取り込まれる。(5)の3,4,6,8の数詞 の場合に見られる短母音化はこの最音節化の存在を強く肯定している。助数詞の 頭母音 i を先行する音節に入れるために、長母音が短くなると言える。(共時的 に)もともと母音で始まる- ira の場合も、また、h-削除をうけた- hiru の場合 も、 この短母音化が起きるが、「-枚」における母音の短母音化は再音節化では なく、単語として初めて音節化される段階で短母音化が起きる。点を使って音節

の境界を示すという略式の表記をすれば、以上の分析を(6)のように表すことができる。

(6)	一尋	四尋	一枚	四枚
	pusu – hiru	juu – hiru	pusu - ira	juu - ira
				Ļ
音節化	Ļ	Ļ	\downarrow	juui.ra
				Ļ
	pu.suhi.ru	juuhi.ru	pu.sui.ra	jui.ra
下がり核付与	\downarrow	↓ (6)	\downarrow	↓ (6)
	pu.su.hi.ru	juu.hi.ru	pu.sul.ra	jui ra
語中の h - 削除	\downarrow	\downarrow		
	pu.su.i.ru	juu.i.ru		
		\downarrow		
再音節化	\downarrow	juui.ru		
		Ļ		
	pu.suil.ru	jui.ru		

意識としての*pusuiruは再音節化前の構造を反映していると思われる。

複合名詞の sira'ika (アオリイカ), nama'izu (生魚), pusu'iki (一息) などが* siraika 等にならないのは何故であろうか。これらの例の後部成素は単 語(名詞) なのに対して、- hiru や- ira の助数詞は接尾辞的な要素であると考 えられる。このために生じる結合の強度が再音節化を許容しているのであろう。 (5)の数量詞の音調は(4)のではなく、無標の(1)と同じように付与されると思われる。

次の三つの助数詞は分節音の面で不規則とするほかないが、和語系数詞の場合 の音調は規則的である。(漢語系数詞の場合の音調については次節で詳しく扱う。)

- 4 ---

(7) piici	(一つ)	pusuru	(一人)	sikidaci (朔日)/ 「pusui (一日間)
hutaac	(二つ)	hutaaru	(二人)	hu sīka (二日)
miici	(三つ)	micaaru	(三人)	mikka (三日)
juuci	(四つ)	jutaaru	(四人)	jukka (四日)
icici	(五つ)	guni _N	(五人)	gunici ~ isīka (五日)
muuci	(六つ)	rukunin	(六人)	rukunici ~ muika (六日)
nanaci	(七つ)	sicinin	(七人)	sicinici ~ naNka (七日)
jaaci	(八つ)	hacinin	(八人)	hacinici ~ jooka (八日)
kukuni	ici (九つ)	kunin	(九人)	kunici ~ kukunuka (九日)
tuu	(+)	zjuunin	(十人)	tukka (十日)
gjuuci	(幾つ)	gjutaaru	(幾人)	nannici ~ gjuuka (幾日)

以上から、和語系数詞/助数詞の音調付与はきわめて規則的に行われているこ とがわかる。これは他方言と同様である。例えば、東京方言(桜井・秋永1966) では、「-つ」、「-首」と「-通り」だけが例外的で、他の和語系数詞と助数詞の結 合は、2の場合は末尾アクセントになり、他の数詞の場合は、後部成素が三モー ラ以上のもの、アクセントは単語の二モーラ目に、後部成素が二モーラ以下の場 合は無標の複合名詞アクセント(前部成素の末尾モーラにアクセント)になる。

これに比べれば、鳩間方言の漢語系数詞と助数詞の結合は非常に多様である。

2. 漢語系数詞

五十二の後部成素(数詞・助数詞)が音調によって二十六の類(a-z)に分類される。これらをもう少し整理して、又、それぞれの類がどのような相互関係にあるのかを解明すべく、表1のaから順に検討していく。

— 5 —

	а	b	с	d
	里	番地	番	割
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 100 何	icīri niri <u>san</u> ri <u>jonri</u> gori rokuri sicīri hacīri kjuuri zjuuri hjakuri nanri	iciban ci niban ci sanban ci jonbanci gobanci rokuban ci nanaban ci haciban ci kjuuban ci kjuuban ci hjakuban ci nanban ci	iciban niiban sanban jonban goban rokuban nanaban haciban kjuuban zjuuban hjakuban nanban	ici wari/iciwa ri niwa ri san wari/sanwa ri jonwari gowari roku wari/rokuwa ri nana wari/nanawa ri haci wari/haciwa ri kjuuwari zjuu wari/zjuuwa ri nan wari/nanwa ri
所 属 形態素	-zi -bu -su 時、分、升 -du -tu -nin 度、斗、人 -tu -goo -nan 耕、号、男	-peezi -monme ページ、匁		
	e	f	g	1_
$ \setminus $			5	h
	艘	 册	<u>8</u> 尺	n キロ (重さ)
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 100 100 介可			· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	

表] 漢語係数詞と数詞/助数詞の結合

•

\bigvee	i	j	k
	町歩	ドル	円
1	ittjoobu	icidoru	licien
2 3	nitjoobu santjoobu/santjoobu	nido ⁻ ru san ⁻ doru	nien sanen
4	jontjoobu	jondoru	joen
5 6	gotjoobu rokutjoobu	godoru rokudoru	goen rokuen/ [¬] rokuen
7	nanatjoobu	sicidoru/nanadoru	nana en/ nanaen
8 9	hattjoobu kjuutjoobu	hacidoru kjuudoru	hacien kjuuen
10	zittjoobu	zjuudoru	zjuuen
100	hjakutjoobu	hjakudoru	hjakuen
何	nantjoobu/ nantjoobu	nandoru	nanen

\bigwedge	1	m	n	0	р
	段	銭	代	年	分
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 100	icidan nidan sandan jodan godan rokudan/rokudan sicidan/ nanadan hacidan/ hacidan kjuudan zjuudan hjakudan/hjakudan	issen nisen <u>sansen</u> <u>jonsen</u> gosen rokusen nanasen hassen kjuusen zissen hjakusen	icidai nidai <u>sandai</u> <u>jondai</u> godai rokudai nanadai hacidai kjuudai zjuudai hjakudai	icineN nineN san neN joneN goneN rokuneN sicineN hacineN kjuuneN zjuuneN	ippun nihun sanpun jonpun gohun roppun nanahun hacihun kjuuhun zippun hjappun
何	nandan	nansen -ten -bai 点、倍 -zikan 時間	'nandai -sento セント	nannen	nanpun -ken -kin 間、斤

- 7 -

A	q	r	S	t	u
	В	秒	ヶ年	週間	畳
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 100 100 何	icini ci nini ci sannici jonici gonici rokuni ci sicini ci hacini ci kunici nan nici/ nanni ci	icibjoo nibjoo sanbjoo jonbjoo gobjoo rokubjoo nanabjoo hacibjoo kjuubjoo zjuubjoo hjakubjoo nanbjoo	ikkanen nika nen sanka nen jonkanen gokanen rokka nen nanaka nen hacika nen kjuukanen zikkanen nanka nen	issjuukan nisjuukan sansjuukan jonsjuukan gosjuukan rokusjuukan nanasjuukan hassjuukan kjuusjuukan zissjuukan	icizjoo nizjoo saNzjoo joNzjoo gozjoo rokuzjoo nanazjoo hacizjoo kjuuzjoo zjuuzjoo hjaku zjoo naN zjoo

\bigvee	V	w	x	У	Z
	十円	百	万	合	月
$ \begin{array}{c} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 4 \\ 5 \\ 6 \\ 7 \\ 8 \\ 9 \\ 10 \\ \end{array} $	nizjuuen sanzjuuen jonzjuuen gozjuuen rokuzjuuen nanazjuuen hacizjuuen kjuuzjuuen	hjaku nihjaku sanbjaku jonhjaku gohjaku roppjaku nanahjaku happjaku kjuuhjaku	iciman niman sanman jonman goman rokuman siciman haciman kjuuman zjuuman	icingoo ningoo sangoo singoo/jongoo gungoo rukungoo sicingoo hacingoo kungoo	icingaci ningaci sangaci singaci gongaci rukungaci sicingaci hacinguci kungaci zjungaci
100 何	nanzjuuen	[¬] nanbjaku	hjakuman nanman -sen -oku 千、億	nangoo	nangaci

注

- a.「分、升、斗」は10以上がない。「人」は1~4が和語系。「耕」は3のみ。「男」 は3から。「号」は鰹船の名前に付き、1~3しかない。「度」は本来使わない。
- b.「ページ」は本来使わない。
- e.「本」は本来使わない。
- f.「冊」は本来使わない。「角」は3~6,8しかない。
- n. $\lceil \tau \rangle$ lissento b a a.
- P.「斤」は2 nikkin, 10 zikki(n), 100 hjakkiで、「間」は2 nikken。
- r.「秒」は本来使わない。
- S.「ヶ年」は本来使わない。
- y.jongooは若年層の使用形。
- z.「8月」はhacingaci, pacinguciともいう。
- ーモーラの助数詞はすべて a のような音調をとります。a は 4 (jo -, jon -), 5 (go -, gu -), 9 (ku -, kjuu -)が高平で、あとの数詞は起伏型音調である。⁽⁷⁾
- bがaと異なるのは2だけで、aが低平調なのに対して、bは起伏調。だが、こ れは見かけだけの違いであって、起伏型の(μ)σ語(μ = モーラ、σ = 音節) は低平の音調で実現する。これは語末音節の前に二モーラ以上(一韻脚以上) があれば、下がり核は次末音節に現れるが、それより短い語形になると、短す ぎて下がり核が実現せずに、低平音調になる。音調の差は助数詞の長さの差に 起因するものであるから、aとbは助数詞の長さだけで区別がつき、音調で区 別する必要はない。
- cがa/bと違うのも2であるが、これはni-(二)が例外的に長音化したという 分節音韻的現象で、音調だけをとるとcはa/bと一緒に分類できる。
- d は 2 以外の起伏型音調に二通りの音調がある。単純名詞の音調と複合名詞の音 調である。 2 の語形が niwari になっていて、ゆれがない。次末音節に下がり 核があるのは起伏型単純名詞の音調であるが、複合名詞でも、複合語の前部成 素が一モーラの場合、下がり核付与は単純名詞のそれに準じる(理論に基づい た説明および語例はローレンス1997注4、9 参照)から、複合名詞音調でも niwari になる。

もっとも、このちがいは後部成素が二音節二モーラの場合にしか生じ得ない。⁽⁸⁾ eは3,10が低平で、あとはa/b/cと同じ。eの所属形態素はすべて無声子音か ら始まる一音節二モーラ(つまりCVV, CVN)の語形である。

f は3,8,10が低平で、あとはa/b/cと同じ。

- gはfと同様、3,8,10が低平だが、残りの語形は複合名詞の音調になっている。 2の nisaku は d の niwari と同じ理由による。また、「四角」が sikaku にな ることから、この語形から si - (四) が起伏型であることがわかる。
- fとgの所属形態素はすべてCVCVである。
- h は3,10が低平で、複合名詞の音調になっている。nikiroの下がり核の位置は d の niwari と同じ理由による。
- iの後部成素は二音節二モーラのものではないから、音調に現れる複合名詞と単 純名詞の違いが中和されている。3,10が低平なので、hと同じになる。
- j は複合名詞の音調になっており、10だけが低平である。
- kは1,2,3が低平で、6,7は低平と起伏の両音調で現れる。

1は4,5,9が高平で、そして1~3,10は低平。6~8,100は低平と起伏の両方で現れる。 mは高平の4,5,9以外、すべて低平で、nは100以外はmと同じである。

表1の資料についての解釈はひとまずおいて、ここで e ~ n に現れる低平音調 に考察を加えてみたい。共時的な派生過程からみて、低平音調は次の四つのタイ プに分類できる。(A) 起伏型の(μ) σ の語形は低平音調になるが、一部の助 詞の接辞で句が $\mu \sigma$ より長くなると、音調の下がり目が語中に現れ、低平音調で はなくなる点で、他の低平型名詞(以下の(B,C,D))と性格が違う。(B) 単 純名詞で、(μ) σ より長いものが少数ながら存在する。(C)(B)の単純名詞 が複合名詞の前部成素になった時に出来る複合名詞は低平音調になる。(D) 無 標の起伏型名詞が複合名詞の前部成素の時、その前部成素の音調の下がり目がそ のまま保たれる場合がある。前部成素が(μ) σ の場合、複合名詞全体が低平に なる。これは複合名詞では有標の具現形で、無標の場合は後部成素の長さによっ て、次末か前次末音節に下がり核がくる。この類は有標ながら、決して数は少な くない。

 $e \sim n$ に現れる低平は、前部成素がすべて (μ) σ であるから、上の分類の (D)

の類、つまり、有標の複合名詞音調であると考えられる。又、さらに一歩進んで、 最も低平音調の語形が多いmでは、全数詞にわたって有標の複合語音調になって いると考えたい。高平の4,5,9を例外にする必要はない。有標の複合語音調は前 部成素が起伏型の場合にのみ生じるから、高平型成素は例外というよりは、無関 係であると考える。kも1~3と6,7ではなく、1~7が有標であると考えれば、記 述がいっそう簡潔になる。

mは全て有標で、a/b/cはすべて無標。e~lとnはaとmという二極の間 に位置すると考えられ、そのうちのk,l,nはmに近く、h/iとeはa/b/c 寄りと言えよう。

表1にもどって、考察を続けよう。

oは1が高平で、あとはa/b/cと同じ。

Pは1が高平で、3,10が低平。3,10が低平なのはeと同じで、しかもeと同様、 PはすべてCVN, CVV。1が高平なのはoと同じであるから、Pはeとoの両 方の特徴を併せ持っていると解釈できる。

qは3が高平で、あとがa/b/c。

rは1,2が高平、3が低平で、あとがa/b/c。3が低平で10が起伏型になって いるのはkに似ている。kは1~3が低平(有標の複合名詞音調)であるが、

rの1,2が高平のため、有標の複合語音調は表面化しない。

- sは1が高平で、10が低平。10が低平なのはjと同じで、1が高平なのはoと同じであるから、sはjとoの両方の特徴を兼ね備えていると言える。
- tは1~9が高平で、残りは低平。uは10と100以外が高平で、10が低平。tと uは「何-」だけで違う。「何-」が原則的に3に準じるのだとすれば、uは3 が起伏型で、10が低平、すなわちj、あるいはv、の特徴を、そしてtは3,10 が低平であるから、1,mの特徴を共有しているとみることができる。

ここで鳩間方言における高平音調の音韻論的位置づけについて概説しておきたい。鳩間方言は基本的にいわゆる「二型アクセント」の言語であると見られる(加 治工1992:317; ローレンス1997)。二型というのは、ここでいう起伏型((μ) σの低平を含む)と高平型であって、単純名詞の約97%、全語彙の76.7%がこの 二型におさまる。起伏・高平の内訳をみると、単純名詞の63.4%が起伏型で、33.5 %が高平型(全語彙でみても、起伏型45.1%、高平型31.6%)になっているから、 起伏型が無標で、高平型が有標であると言えよう。だとすれば、数詞/助数詞の 結合で、 a / b / c が無標(4,5,9が高平であるが、これは a / b / c の所属形態素 の特徴によるものではなく、それぞれの数詞の語彙的特徴であると考えられる)、 t、 u が割合有標(1~9が高平)で、 p~sをその間に位置づけることができる。

再び表1にもどって、作業を進めよう。

vは2が低平で、5が起伏型になっている。

wは3,8,10が低平ということで、f/gに近いと言える。しかも、f/gと同様、 wは無声子音で始まる二つの軽音節(略して CV CV)という音形である。f/ gと違うのは5が起伏型になっていること。

×も5が起伏型であるが、これを除けば、×はmと同じである。

5が起伏型で現れる v、w、 xの所属形態素は「十、百、千、万、億」で、す べて数詞である。5は数詞との結合においては起伏型であって、助数詞との結合 においては高平型と、一種の相補分布があるから、高平型の5が数詞と結合して 起伏型になるか(8 a)、あるいはその逆(8 b)、とどちらかの過程が働いてい ると考えられる。

(8) a. 5 → 起伏 / ____数詞
b. 5 → 高平 / ____助数詞

(8 a)は有標(高平)の5を無標にする規則で、(8 b)は5を基底では無標(起 伏)にして、それをある環境において有標にしている。(8 a)と(8 b)の選 択は、すなわち、5を基本的に有標とみるか、無標とみるかにかかる。これを決 定する資料は次のものである。

(9) 「ici (一) 「roku (六) 「nii (二) 「sici (七)

「san (三)	[¬] haci	(八)
「sii, jon (四)	kuu	(九)
「goo (五)	[¬] zjuu	(+)

数詞が単独で使われる場合、jon と kuu は数詞/助数詞との結合の場合と同様、 高平(長母音化は、自立語が二モーラ(厳密には一韻脚)以上でなければならな いという制限のために起きる)であるが、5は起伏型になっている。これで(8 b)が正しいことが判る。すなわち、jo(N)-, k(ju)u-⁽⁹⁾は語彙的に有標の音調型 になっているが、5は基本的には無標であって、規則の適用で助数詞との組み合 わせにおいて、有標になる。

表1のУ, 2は、若年層のjongoo 以外、全て起伏型である。もう一つの特徴は、 -N-が語形に含まれていることである。5,9が高平型ではなく、起伏型になるの は他の助数詞の場合と異なる。これはNと何らかの関係があるのではないかと推 察できる。すなわち、語中のNがあるが故に、高平型であるべき5,9が起伏型に 変わっているということである。Nが数詞の有標の高平型を無標の起伏型に変え るのである。jongoo が高平で現れるのは、jongoo のNはjoNのNであって、他の 形に現れるNではないというふうに解釈できよう。具体的にいうと、joN-Ngoo という結合ができたら、二つ目のNが削除されることを提案する⁽⁰⁾削除されると、N の持っている働きも同時に消失する⁽¹⁾Nが助数詞の一部であるとすれば、Nが消 失しても、その持っている働きは助数詞の残存部に残ると思われるので、Nは助 数詞の頭子音ではなく、一形態素であると考えなければならない。無意味形態素 (宮島1973) であるが、-N-には前部成素(数詞)の音調標識を削除して、無標 にする働きがある。有標音調(高平調)を示す標識を『有音』で表すと(10)のよう な派生になる。

(10) ni - N - goo → ni - N - goo → ni N goo (二合)
 『有音』削除
 『有音』削除
 ③ 「有音」削除

NII-Electronic Library Service

 $jon - n - goo \rightarrow jon - goo \rightarrow jongoo'(四合)$ "有音」『有音』削除 『有音」 $<math>ku - n - goo \rightarrow ku - n - goo \rightarrow kun goo (九合)$ "有音』『有音』削除

y, z は- N-の持っている特殊な素性のために、その他の a ~ x と根本的に異なるので、以下の音調による数詞/助数詞の分類から省略する。

上で二種類の有標性を紹介した。有標の複合名詞音調として、起伏型の前部成 素の複合語化前の下がり核の位置が保たれるものがある。漢語系数詞は長くて二 モーラなので、起伏型は低平調になる。有標の複合名詞音調の場合は、複合名詞 全体が低平型になる。もう一つの有標性は、別の次元のもので、起伏型音調に対 して、高平型が有標であるというものである。この二つの有標性をグラフの軸に 見立てて、上の分析結果を整理してみよう。

横の軸を複合語音調に当て、左側を無標、右側を有標にして、そして縦の軸で 音調型を表し、上を無標、下を有標にして、それぞれの軸で有標になっている数 詞を丸で囲んだ数字で表して、表1の資料を表2のようにまとめることができる。

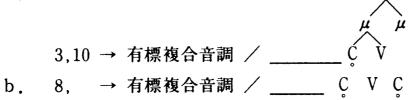
	$ \begin{array}{c} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 4 \\ 5 \\ 6 \\ 7 \\ 8 \\ 9 \\ 10 \\ 100 \\ 100 \end{array} $	$ \begin{array}{c} 1\\ 2\\ 3\\ 4\\ 5\\ 6\\ 7\\ 8\\ 9\\ 10\\ 100 \end{array} $	$ \begin{array}{c} 1\\ 2\\ 3\\ 4\\ 5\\ 6\\ 7\\ 8\\ 9\\ 10\\ 100 \end{array} $	1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 100	① ② 3 4 5 6 7 8 9 100	$ \begin{array}{c} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 4 \\ 5 \\ 6 \\ 7 \\ 8 \\ 9 \\ 10 \\ 100 \end{array} $	 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (100) 	1) 2) 3) 4) 5) 6 7) 8 9 100	1) 2) 3) 4) 5) 6) 7) 8) 9) 100	1 2 3 4 5 6 7 8 9 1 8
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	a,b,c,d	e,h,i	f,g,w	h,i,j	v	k	k	1	l,n	l,m,x
① 2 3 4 5 6 7 8 9 10	0	р		S						
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	q									
12345678910						r				
12345678910				u						t

表2 数詞/助数詞の分類(暫定案)

-14 -

表2の横軸の左の欄は無標。三つ目の欄は語形に特徴があって、所属形態素は全て CV CV である。又、二つ目の欄の内の e,p も同様に特徴があって、全て CVV/ CVN である。これらの語形と音調の関係を規則で捉えようとすれば、(11)のよう な規則になる。

(11) a.



この二つの規則は例外なく適用すると思われる。

(8b)と(11a、b)の三つの規則で表2が表3になる。

表3	数詞/	助数詞の分類	(最終案)
----	-----	--------	-------

	$ \begin{array}{r} 1 \\ 2 \\ 3 \\ 4 \\ 5 \\ 6 \\ 7 \\ 8 \\ 9 \\ 10 \\ 100 \\ $	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 100	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 100	 2 3 4 5 6 7 8 9 100 	1 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 100	 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (10) 	 (1) (2) (3) (4) (5) (6) (7) (8) (9) (9) (9) (10) 	1 2 3 4 5 6 7 8 9 100	1 3 4 5 6 7 8 9 2 8
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	a,b,c,d, e,f,g,w	h,i	h,i,j	v	k	k	1	l,n	l, m, x
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	o,p		s						
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10	q								
12345678910					r				
12345678910			1	1					t

表2、3では、複合名詞扱いの数量表現(例えばd,g,h)と単純名詞扱いの数量 表現(例えばf,q,w)の違いを無視して、分類を行ったが、ここでその違いにつ いて考えてみよう。

表4 下がり核の付与の仕方

表4からわかるように、複合名詞扱いを受ける数量表現は単純名詞扱いのものと 同数である。だが、「キロ、ドル」は部分的ながら、有標の複合名詞音調(低平) をとるから、複合名詞扱いになるのは当然であろう。このために、有標の複合名 詞音調をとる助数詞(表3の左の欄以外)は全て複合名詞扱いであるとみること ができる。「キロ、ドル」が複合名詞の音調になるのはこのように表3から読み取 れるから、特別に標識を持っていると考えない。「キロ、ドル」を表4からはずす と、残る助数詞の多くは単純名詞扱いということになる。また、 zの「月」も、 - N - が助数詞の一部ではないとすれば、単純名詞扱いを受けた助数詞になる。 このように、数の上では単純名詞扱いの方を無標の場合とみることができよう。 「尺、勺、割」だけが有標、すなわち、特別な標識を持っている、と考えられる。 したがって、この三つの助数詞が表3の第三の軸を成すことになる。

和語系数詞の数量表現は複合名詞扱いが無標なのに、漢語系のものは単純名詞 扱いが無標になっているということは、一見不思議な分布であるが、これは数詞 の長さと関係がありそうである。第1節では、音節化の関係で短くなることがあ るものの、和語系数詞を基本的に二モーラ(以上)のものとして扱ってきた。一 方では、漢語系数詞には一モーラのもの(二、四、五、九)が少なくない。鳩間 方言に前部成素が一モーラの複合名詞はあるが、その場合は複合名詞の下がり核 の位置ではなく、単純名詞のになる。漢語系数量表現は、一モーラの数詞に引か れて、全数詞にわたって単純名詞扱いになったようである。

表1に1000は出ていないが、1000で始まる数量表現はすべて低平になる(12)。

(12) 「senri (千里) 「sennen (千年) 「senen (千円)」
 「sengi (千斤) 「sennici (千日) 「sendoru (千ドル)

複合音調の軸で最も無標のa/b/cでも、何故1000が低平になっているかは説明

- 16 -

を要する。 sen を有標の低平型にはできない。 $\mu \sigma$ より長い有標の低平型単語は あるが、(μ) σ のものはないようである。又、1000は、助詞が付くと sen - nu (千の) という低平ではない音調になるから、やはり sen という自立形は普通の (μ) σ の起伏型単語であるという結論に導かれる。説明として一つ考えられる のは、 sen - は* issen (一千) の略ということである。* issen は表1にないが、1000 は表1の x 類に属し、(8 b) の規則の適用を考慮に入れれば、mと同類になるか ら、* sen が予想される。共時的に sen > sen という規則を仮定すること によって、* issen の欠如と、何故1000だけが助数詞との結合において必ず低平 になるということを同時に説明できる。

以上の考察によって、五十二の数詞/助数詞を十五の類(表3の十四プラスソ/z) に整理することができた。最も無標の類(表3の左上のマス)には二十五の形態素があり、半数近く占めている。

琉球方言における漢語系数詞を使った数量表現は、比較的新しいものであると 考えられがちであるが、そうならば、借用されたものであるということになる。 借用語は意味と基本的な音形は借用されるが、不規則的な活用などは容易に借用 されるものではないことは歴史言語学の常識とするところであろう。しかし、鳩 間方言の数量表現の音調の有標の(不規則的な)箇所に対応する現象が琉球方言 の別派に存在する。南琉球方言である鳩間方言の高平型の1、3(表1~3の0、 P、 q)は北琉球方言の沖縄北部方言である今帰仁方言にも不規則的なアクセン トになる(今帰仁方言: 2iccin(一斤), 2iccin(一間), 2icinin(一年), sannici(三日)(仲宗根1983))。今帰仁方言のcuu-/kjuu-(九)と jun-(四) も同じアクセントの位置になる(ku-, ju-は無標)が、これは鳩間方言の4、 9の高平型音調と無関係ではないだろう。4,9の音調が借用によるとしても、数 語にしか現れない鳩間・今帰仁両方言の1,3の有標の音調は借用されたものであ るとは考えにくい。

又、系統的にもっと離れたところにも共通点が見出せる。桜井・秋永(1966) の東京方言の漢語系数詞を含む数量表現を以上と同様な手順で分類すると、表5 が出来る。

— 17 —

尾	Ι	Н	G	F	E	D	С	А	無	b	d	g	無
高	<							\rightarrow	標	←		\longrightarrow	7
		1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3	3
4	ヨン	イE ②		ヨン	ヨン ③	ンE ()	イE ②	4	4	マモ ③	3	Э	4
5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	5	(5)	5	5
6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6	6
Ø	ナナ	ナナ シチ	(> 7)	ナナ シチ	ナナ	7	ナナ シチ	7	7	7	7	ナナ	Ī
8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
9	キュウ	キュウ	ク	キュウ	キュウ ⑦	Ø	キュウ ⑦	9	9	キュウ ②	キュウ ②	キュウ	9
10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10

表5 東京方言の数詞/助数詞の分類

規則

ÇÇVÇV → 尾高

所属形態素

А	足	F 合
С	+	G 日、月
D	艘、升、人	H 寸、尺、百、着(衣服)
E	度(回数)	I 回、卷、貫、銭、点、版
尾高	千、万、畳、着(到着)、-	.目(序数)
b	軒、台、代、町、丁、杯、票、	本、枚、名、面、問
d	段、年、番	g 円
無ア	桜井・秋永(1966)のI類	無標 その他

東京方言でも二つの軸で有標性が見られるが、一つの数詞/助数詞が両方で有標 になることがない点で鳩間方言と様相を異にしている。この点からみて、鳩間方 言の方が複雑と言えよう。しかし、共通点もある。CVCVの音形の(助)数詞は 規則の適用を受ける。規則の内容こそ違うが、CVCVが特別扱いを受けているこ とは鳩間方言と同じである。また、「-千、-万」はある軸で全ての数詞に亘って 有標になっているのに対して、「-十」は同じ軸でやや有標になっているのも鳩間 方言と同じである。

鳩間方言の漢語系数量表現と北琉球方言、そして本土方言との間に、類似点が ある。個別の助数詞は借用されたに違いないが、漢語系数詞の(アクセント・音 調の)「活用」体系は相当古い時期まで遡るのではないかと考えられる。この体 系の再建のために、琉球、本土両系統のたくさんの方言の漢語系数量表現のアク セントを比較しなければならないが、これを今後の課題としたい。

3. 序数詞

序数詞は(13)のように-meを接尾して形成される。(*) はその語形は無理に作ら れたものであることを示し、あえて言えばこの発音になるが、普通はこのような 言い方をしないものである。

(13)	husïkame	(二日目)	mikkame	(三日目)
	jukkame	(四日目)	gunicime	(五日目)
	rukunicime	(六日目)	sicinicime	(七日目)
	hacinicime	(八日目)	kunicime	(九日目)
	tukkame	(十日目)	ninenme	(二年目)
	nidaime	(二代目)	sandaime	(三代目)
	(*) rokudorume	(六ドル目)	(*) issakume	(一尺目)

序数詞の音調の下がり目の位置は複合名詞のものと一致している。すなわち、前 部成素が高平型の場合は高平型に、規則的な起伏型は起伏型になる。前部成素が 有標の複合名詞音調の場合は、前部成素の下がり核の位置が保たれる。 注

- (1) 沖縄県立芸術大学附属研究所平成8年度客員研究員 オークランド大学アジア言語・文学学科講師
- (2) 鹿児島(平山1960)、奄美(平山(編) 1986)、沖縄(仲宗根1983; 国立国語研究所 (編) 1969)の諸方言では「幾-」が数詞1と同じ型になっているのに対して、2 と同じ型になっているのは宮古・八重山・与那国諸方言(平山1967; 宮城(近刊))の特徴である。これは南琉球祖語が分化する前に起こった突発的な変化であるこ とを物語っている。
- (3) より正確には、右端の韻律的な強弱型(iambic) 韻脚の主要部が支配するモーラ に付与する (ローレンス1997参照)。
- (4) この場合、先行する長母音は短母音化する。

mikkubi 三着 yakku 八個 gjukkara 何匹

- (5) 本文の例と加治工(1983)のもの(計32の助数詞)以外にも、和語系数詞と結合す る助数詞として少なくても次のものがあり、以下のものはすべてこのグループに 入る。
 - asi (歩), busi (寸、砂糖黍の節), jaku (漕ぎ), jama (お嶽、神、 薪などの山), - kita (縄・網の長さの単位), - kku (個), - kui (曲), - makaru (椀一杯), - mata (叉), - nanka (死後七日ごとの法事), - pan (歩), - siki (ヶ月), - sitadaru (房), - sizi (粒), - sizi (長い 繊維一本), - ton (ヶ所), - tusi (ヶ年)
- (6) ローレンス(1997)では、高平型は語末に下がり核(H)が付与されると論じた。
- (7) 「何-」は基本的に、3と同じ下がり核の位置になるが、3と違って、高平になる ことはない(?)。特に必要がない限り、「何-」を以下の考察からはずす。
- (8) µµ CVCV や CVCVNCVCV の後部成素にも生じ得るが、漢語系数詞と結合する助数 詞に当該形は見つかっていない。厳密にいえば、「次末音節が韻脚の主要部ではな い場合にしか生じない」とした方が正しい。
- (9) 正確には、9は、標準語と同じく、/k(i)u/とすべきであろう。
- (10) 鳩間方言には NC-で始まる形態素はあるが、複合語化などによって-N-NC は生じ ないようであるから、この N-削除は一般的な音節化に還元できよう。
- (11) 削除であって、haplology ではない。Haplology であるとすれば、N は一つしか音

声形に現れないが、Nがもつ、起伏型にする働きは消えないで、*jongoo という形が予想される。

謝辞

本稿の執筆に際して、本研究所所長の加治工真市教授に忍耐づよくご教示いただいたことに心から感謝の意を表したい。

参考文献

加治工真市 1983.「沖縄県竹富町方言」『全国方言辞典1』pp.297-301.角川書店

- 加治工真市 1992.「鳩間(八重山)方言」『現代日本語方言大辞典1』pp.314-20.明 治書院
- 国立国語研究所(編) 1969. 『沖縄語辞典』 大蔵省印刷局
- 桜井茂治・秋永一枝 1966.「数詞,助数詞の発音とアクセント」日本放送協会編『日本 語発音アクセント辞典』pp.91-101.日本放送出版協会
- 仲宗根政善 1983. 『沖縄今帰仁方言辞典』角川書店
- 平山輝男 1960.『全国アクセント辞典』東京堂出版
- 平山輝雄 1967. 『琉球先島方言の総合的研究』明治書院
- 平山輝雄(編) 1986. 『奄美方言基礎語彙の研究』角川書店
- 宮島達夫 1973.「無意味形態素」国立国語研究所編『ことばの研究 第4集』pp.15-30. 秀英出版

宮城信勇 (近刊)『石垣方言辞典(仮称)』

ローレンス・ウエイン 1997.「鳩間方言のアクセント — 名詞」『沖縄文化』32:1. 1-26.

-21 -